

「農学系」教育評価報告書

(平成14年度着手 分野別教育評価)

鹿児島大学農学部

平成16年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構(以下「機構」)が行う評価は、大学及び大学共同利用機関(以下「大学等」)が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その結果を、大学等にフィードバックし、教育研究活動等の改善に役立てるとともに、社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の教育研究活動等について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構が行う評価は、今回報告する平成14年度着手分までを試行的実施期間としており、今回は以下の3区分で評価を実施した。

- (1) 全学テーマ別評価(国際的な連携及び交流活動)
- (2) 分野別教育評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)
- (3) 分野別研究評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)

3 目的及び目標に即した評価

機構が行う評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、目的及び目標が、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、規模や資源などの人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

分野別教育評価「農学系」について

1 評価の対象組織及び内容

今回の評価は、設置者から要請があった大学の学部及び研究科(以下「対象組織」)を対象とし、学部、研究科のそれぞれを単位として実施した。

評価は、対象組織の現在の教育活動等の状況について、原則として過去5年間の状況の分析を通じて、次の6項目の項目別評価により実施した。

- (1) 教育の実施体制
- (2) 教育内容面での取組
- (3) 教育方法及び成績評価面での取組
- (4) 教育の達成状況
- (5) 学習に対する支援
- (6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

2 評価のプロセス

- (1) 対象組織においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書(根拠となる資料・データを含む。)を平成15年7月末に機構へ提出した。
- (2) 機構においては、専門委員会の下に評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査を実施した。
なお、評価チームは、各対象組織により、教育目的及び目標に沿って評価項目の要素ごとに独自に設定された観点に基づき分析を行い、その分析結果を踏まえ、要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献(達成又は機能)の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で評価項目全体の水準を導き出した。
- (3) 機構は、これらの調査結果を踏まえ、その結果を専門委員会で取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。
- (4) 機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった対象組織について、平成16年3月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

3 本報告書の内容

「対象組織の現況及び特徴」、「教育目的及び目標」及び「特記事項」欄は、対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「評価項目ごとの評価結果」は評価項目ごとに、貢献(達成及び機能)の状況を要素ごとに記述している。

また、当該評価項目の水準を、これらの状況から総合的に判断し、以下の5種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- ・十分に貢献(達成又は機能)している。
- ・おおむね貢献(達成又は機能)している。
- ・相応に貢献(達成又は機能)している。
- ・ある程度貢献(達成又は機能)している。
- ・ほとんど貢献(達成又は機能)していない。

なお、これらの水準は、対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、評価項目全体から見て特に重要な点を、「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について、その内容を転載するとともに、それへの機構の対応を示している。

4 本報告書の公表

本報告書は、対象組織及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象組織の現況及び特徴

対象組織から提出された自己評価書から転載

1. 現況

- (1) 機関名 鹿兒島大学
 (2) 学部名 農学部
 (3) 所在地 鹿兒島市郡元 1 - 21 - 24
 (4) 学科構成
 生物生産学科
 生物資源化学科
 生物環境学科
 獣医学科
 (5) 学生数及び教員数
 学生数 1120 名
 教員数 105 名

2. 特徴

鹿兒島大学農学部の歴史は、明治 41 年勅令によって設置された鹿兒島高等農林学校まで遡る。本校は農学科と林学科の 2 学科で発足したが、のちに大正 9 年養蚕学科、同 10 年農芸化学科、昭和 14 年獣医学科を増設して拡充が図られ、昭和 19 年には校名を鹿兒島農林専門学校と改称、昭和 23 年には農業電気科を新設して 6 (学) 科構成となった。一方、学科の拡充と平行して、技術の修得に重点を置いた教育を進めるため、校内農場・植物園 (明治 41 年)、高隈演習林・佐多演習林 (明治 42 年)、種子島牧場 (大正元年 昭和 43 年入来牧場に移転)、唐湊果樹園 (大正 5 年)、指宿植物試験場 (大正 7 年)、桜島溶岩実験場 (昭和 6 年)、家畜病院 (昭和 16 年) の附属教育研究施設が逐次設けられた。

昭和 24 年学制改革に伴い、新制鹿兒島大学 (文理・教育・農・水産の 4 学部構成) が設置され、農学部はその構成学部の一つとなった。本学部は鹿兒島農林専門学校を母体として、農学科・林学科・蚕糸学科・農芸化学科・獣医学科の 5 学科 (学生定員 150、教官定員 65) で発足し、その後昭和 28 年総合農学科の設置、昭和 38 年の学科再編成 (蚕糸学科と総合農学科の廃止、畜産学科と農業工学科の新設) を経て、昭和 44 年には園芸学科を新設し、逐次拡充が図られた。平成 2 年には獣医学科を除く

6 学科を生物生産学科・生物資源化学科・生物環境学科の 3 学科とする学科再編成が行われ、平成 9 年教養部廃止に伴う一部教育コースの見直しを経て現在に至っている。

この間、大学院も相次いで設置された。昭和 41 年には大学院農学研究科修士課程 (5 専攻 学生定員 48) が、昭和 63 年には本学を設置大学とする博士課程の鹿兒島大学大学院連合農学研究科 (4 専攻 学生定員 22) が、さらに平成 2 年には本学を構成大学とする山口大学大学院連合獣医学研究科 (1 専攻 学生定員 12) がそれぞれ設置された。

鹿兒島高等農林学校は「南方開発」を、開学の使命として設置され、「學術技芸を教授するとともに、識見を具え、責任を重んじ、質実剛健にして、且つ独立心、奉公心に富む、国家有用の人材の養成」の教育方針のもと、昭和 27 年鹿兒島農林専門学校としての歴史を閉じるまで、4,400 余名の得業生 (卒業生) を世に送り出し、わが国農林業の発展に大きく貢献した。この開学の使命は、「本学部の地理的位置に鑑み暖地農林業開発に関する専門科学と技術とを深く教授研究して暖地産業の発展に資することを使命とする (農学部規程 昭和 24 年制定)」として、新制鹿兒島大学農学部を受け継がれた。

本学部は現在、4 年課程の生物生産学科、生物資源化学科及び生物環境学科の 3 学科・10 教育コースと、6 年課程の獣医学科の 4 学科から構成される。わが国有数の食料生産基地を抱え、多様な自然環境と生物資源に恵まれた地域の特性を活かして、豊かな人間性と広い視野、応用・実践能力、国際性を備え、地域社会に貢献できる農林業及び食品産業等の関連分野の技術者・指導者の育成を行っている。獣医学科においては動物と人の健康・福祉に貢献する獣医師を養成するとともに、研究者としての資質を備えた学生には大学院連合獣医学研究科 (後期博士課程) へ進学できるよう指導している。

これらの目的を達成するために、社会・人文科学を含む教養教育、専門教育に必要な基礎教育、バイオサイエンス・バイオテクノロジーなど最先端の科学技術を取り入れた専門教育、附属施設等を利用した実験・実習教育、生産現場や地域社会などフィールドにおける体験型教育、課題探求・解決能力を育成するための教育、国際性の涵養を促す教育に重点を置きながら、4 (6) 年一貫教育を行っている。

教育目的及び目標

対象組織から提出された自己評価書から転載

1. 教育目的

- (1) わが国固有数の食料生産基地を抱え、多様な自然環境と生物資源に恵まれた地域の特性を活かして、豊かな人間性と広い視野、応用・実践能力、国際性を備えた農林業及び食品産業等関連分野の技術者・指導者の育成を目指す。獣医学科においては動物と人の健康・福祉に貢献する獣医師を養成する。
- (2) 他学部との連携・相互協力により、教養（共通）教育・基礎教育と専門教育を有機的に結び付けた4(6)年一貫教育を行う。
- (3) 学生の学習意欲の向上に動機付け教育が極めて重要であるとの認識に立ち、その充実を図る。また学生が希望する進路に進むことのできる能力を育成する。
- (4) 上記(1)(2)(3)の目的に沿って実施した教育の達成状況を客観的に把握・分析し、その結果を踏まえて教育内容及び教育方法を不断に改善する。
- (5) 学生受入方針（アドミッション・ポリシー）を確立するとともに、評価尺度の異なる入学試験を実施し、異なる資質・能力をもった学生を受け入れる。
- (6) 学生がそれぞれの資質・能力・適性を高めることにより、自らの力で履修計画及び学習計画を作成することができるよう、学習支援体制を不断に整備する。
- (8) 地域社会の発展に貢献できる技術者・指導者を養成する。
- (教育目的(2)に対応する目標)
- (9) 教養科目は低学年次から高学年次まで配置し、また専門科目の一部を「開放科目」として開講することにより、総合大学の特性を活かした教育を行う。
- (10) 農学の視点から教養教育の充実に寄与する。
- (教育目的(3)に対応する目標)
- (11) 低学年次に動機付け教育を実施する。
- (12) ティーチング・アシスタント制度によりきめ細かい指導を行う。
- (13) 大学院への進学を促すための授業科目を配置し、卒業論文研究内容を充実させる。
- (14) 成績評価方法を公表する。
- (15) 飛び級による大学院への入学制度を実施する。
- (教育目的(4)に対応する目標)
- (16) ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動に基づいて授業内容・方法を不断に改善する。
- (17) 在学生、教官、卒業生並びに雇用主に対しアンケート調査を行い、教育の達成状況を自己点検する。
- (18) 自己点検を踏まえ教育の達成状況について外部評価を受ける。
- (19) 自己点検並びに外部評価に基づいて教育の質の改善に結び付けるためのシステムを整備する。
- (教育目的(5)に対応する目標)
- (20) 学生受け入れ方針に沿って多様な入学試験制度を実施する。

2. 教育目標

- (教育目的(1)に対応する目標)
- (1) 学問の動向や地域社会が抱える課題の把握分析に基づいて教育組織（学科・教育コース等）を充実する。
- (2) 教養・専門科目のバランスに配慮しながら教育課程の体系的編成を行う。
- (3) 応用・実践能力を育成するために実験・演習・実習科目を効果的に配置する。
- (4) 附属施設（農場、演習林、家畜病院）の教育機能を充実する。
- (5) 教員免許状や各種技術資格の取得に必要な授業科目を配置する。
- (6) 民間企業や団体、地域社会から講師を招聘し、特別講義を実施する。
- (7) キャリア感覚を身につけるために、民間企業や農家など学外における研修、インターンシップを実施する。
- (21) 入学試験制度、教育実施体制とその意図を学内外へ周知公表するための手段を充実する。
- (教育目的(6)に対応する目標)
- (22) 学生の履修計画作成に資するシラバスを作成する。
- (23) 学生の履修コース選択や履修計画作成のためのガイダンスを行う。また学習や進路、学生生活上の悩みや相談に応じるための相談・助言体制を敷く。
- (24) 海外の大学との交換留学や国際貢献を推奨し、支援する。
- (25) 留学生支援のためのチューター制度を設ける。
- (26) 基礎学力不足を補うために補習授業を実施する。
- (27) 図書室や実験室、情報メディア機器など学習支援環境を整備する。

評価項目ごとの評価結果

1. 教育の実施体制

この項目では、対象組織における「教育の実施体制」について、「教育実施組織の整備に関する取組状況」、「教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況」及び「学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素1】教育実施組織の整備に関する取組状況

学科、教育コースの構成について、教育目的に沿ったバランスのとれた学科構成が行われ、柔軟性のある教育コース制により、きめ細かな教育実施体制を採っており、生物生産学科家畜生産学コースの授業科目に獣医学科の教員が参加するなど学科間の協力が図られている。また、附属施設（農場、演習林、家畜病院）も有効に活用されており、これらの取組は、優れている。改善の必要性が指摘されている獣医学教育については、当面の改善策が計画されているものの抜本的な対策が明らかにされていない点は、検討を要する。

教員組織の構成について、年齢構成はバランスがよくとれており相応であるが、助手が少ない点や女子学生が半数を占めている現状を踏まえると女性教員が少ない点（特に女性の教授・助教授はゼロである）は、改善の余地がある。

【要素2】教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況

学生・教職員に対する周知方法について、資料配布・ガイダンスの他に、入学時の農学概論や教育コースの概論の開講は、相応な取組である。

学外者、特に受験生への周知を重視し、オープンキャンパス等通常の方法に加え、体験コースや高等学校の進路指導担当者との懇談会、高校からの要請による出前講義などでの周知の努力、またその参加者数も増加していることは、相応である。

【要素3】学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況

学生受入方針は、これまで学部や学科の教育理念や教育目標、教育内容等を受験生向けパンフレット（大学案内及び学部案内）や学部紹介ビデオなどで周知し学生の受入を行ってきており、平成16年度の学生募集要項により初めて「受入方針」として策定されたものが示されたことは、相応である。ただ、学生受入方針は、大学の教育方針を直接示すもので、なるべく早い時期に策定すべきものと考えられ、作成した時期としては、若干遅いという感も否めない。

学内外への周知、公表については、現在策定されたばかりであるが、学生募集要項への記載など、相応の取組が行われている。

学生受入方針に従った受入方策について、選抜方法は極めて一般的であり相応である。受入方針に沿った学生を選抜する方法について、多数を占める一般選抜についての工夫が見られないことは検討の余地がある。

この項目の水準は「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

特に優れた点及び改善点等

学科、教育コースの構成について、教育目的に沿ったバランスのとれた学科構成が行われ、柔軟性のある教育コース制により、きめ細かな教育実施体制を採っており、生物生産学科家畜生産学コースの授業科目に獣医学科の教員が参加するなど学科間の協力が図られている。また、附属施設（農場、演習林、家畜病院）も有効に活用されており、これらの取組は、優れている。

教員組織の構成について、助手が少ない点や女子学生が半数を占めている現状を踏まえると女性教員が少ない点（特に女性の教授・助教授はゼロである）は、改善の余地がある。

2. 教育内容面での取組

この項目では、対象組織における「教育内容面での取組」について、「教育課程の編成に関する取組状況」及び「授業の内容に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素1】教育課程の編成に関する取組状況

体系的な編成として、入学当初に開講されている「農学概論」は動機付け教育として優れている。ただ、共通教育と専門教育のバランスについては、現状で良いと考えている教員は必ずしも多くなく、また講義、演習、実験、実習のバランスについても現行と異なる希望を持つ学生の比率が高いことから、検討の余地がある。

編成上の配慮として、学生の広い視野の形成とその多様なニーズに応えるため、他学部の専門科目の受講や単位の算入、他大学との単位互換の実施、また短期大学からの編入学を受け入れていることは、教育課程の柔軟な編成がうかがわれる。さらに農業高校等からの推薦入学への補習授業の実施、全教員の共通科目への参加及び教員採用時における共通教育の担当の明記を行うなど、これらの取組は優れている。ただ、一般入試で入学した学生に対する未履修科目等についての補習授業等をより積極的に行うなどの対策が必要である。

教職免許並びに各種技術資格の取得に必要な授業科目が適切に配置されていることは優れており、また家畜体内受精卵移植及び家畜体外受精卵移植師の資格が国内で鹿児島大学と他1大学のみで得られることは、特筆すべきことである。

高度な専門科目の配置や卒業研究内容の充実に関して、卒業論文への取組に関する学部学生アンケートの評価結果から、相応である。

学外講師を招き、学生の知的好奇心を刺激する特定分野の第一人者の講義を用意する取組は、卒業後の職業意識啓発等にとって有効であり、優れている。ただ、一部の学科だけでなく、全学部的な取組に発展させることが課題である。

民間企業や農家など学外における研修の取組状況として、近隣のみならず、「国際協力農業体験講座」や「国際農学・農業体験講座・北米コ・ス」といった国外での研修を行っていることは、国際性を身に付けさせる教育として、特に優れている。

キャリア感覚を身に付けさせるための取組として、早い時期から大学が鹿児島県と連携して、学生にインターンシップ（学生が在学中に企業等において自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと）への参加を積極的に呼びかけ、約30%の学生の参加があること及びインターンシップの単位認定の取組は、優れている。

【要素2】授業の内容に関する取組状況

授業内容等の改善の取組として、教務委員会、FD委員会、入学者選抜方法検討委員会等が設置され、特にFD委員会では学生の授業評価アンケートを実施し、その評価結果を十分利用、活用しており、これら各種委員会が全学の委員会と連携し、教育方法、内容等の改善を図っている取組は、優れている。

シラバス（各授業科目の詳細な授業計画）に関して、活用していない学生が31%にのぼること、授業科目によって程度の差はあるが全般的にシラバスがやや不備であり、平成15年度から充実を図っているが、更に充実することなど、検討の余地がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

特に優れた点及び改善点等

教職免許並びに各種技術資格の取得に必要な授業科目が適切に配置されていることは優れており、また家畜体内受精卵移植及び家畜体外受精卵移植師の資格が国内で鹿児島大学と他1大学のみで得られることは、特筆すべきことである。

民間企業や農家など学外における研修の取組状況として、近隣のみならず、「国際協力農業体験講座」や「国際農学・農業体験講座・北米コ・ス」といった国外での研修を行っていることは、国際性を身に付けさせる教育として、特に優れている。

3. 教育方法及び成績評価面での取組

この項目では、対象組織における「教育方法及び成績評価面での取組」について、「授業形態、学習指導法等の教育方法に関する取組状況」、「成績評価法に関する取組状況」及び「施設・設備の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素1】授業形態、学習指導法等の教育方法に関する取組状況

講義・演習・実験・実習など各授業形態のバランスについて、実習や演習を増やすべきという学生と教員の意見がかなり多く、検討の必要がある。

授業内容の理解を促すための取組として、基礎学力が不足している学生への補習授業、「授業科目の目標」を学生に説明して授業を進めることなど、授業方法を工夫する教員が多数いることは、相応である。

ティーチング・アシスタント（学部の教育補助業務を行う大学院学生。以下「TA」という。）制度について、現在ではほとんど定着した事ではあるが、教員の教育活動において、十分な教育効果を得るためにTA制度を積極的に活用する取組は、相応である。

【要素2】成績評価法に関する取組状況

成績評価基準の設定について、その厳格化と統一化、そしてその公表は極めて重要であるにもかかわらず、ほとんど取組がなされておらず、問題がある。

大学院農学研究科で「飛び級による大学院入学」を導入しているが、その前提となる成績評価が厳格でなく、かつ統一されておらず、成績評価についての取組は、問題がある。特に、卒業生へのアンケート調査から、成績評価が「甘すぎる」との回答も30%近くいることから、早急に改善を要する。

卒業論文発表会が複数教員の参加の下で行われていることは卒業論文の評価の取組として相応である。ただ、卒業論文発表会が研究室単位で行われている場合があり、

発表会のユニットとしては小さすぎる。少なくとも、講座単位以上でないと透明性と客観性に疑問が生じるので、真の評価とはいえず、改善を要する。

【要素3】施設・設備の整備・活用に関する取組状況

視聴覚機器の充実について、大（200名）から小（38名）までの講義室が23室あり学部の講義を行うのには十分な規模であるが、各講義室には液晶プロジェクターが装備されておらずIT機器の充実は不十分であり、82%の教員が不十分とし、32%の卒業生しか十分と感じていない視聴覚機器の現状については、検討の余地がある。

講義・実験・実習・卒業研究のための教育施設・設備の充実と高度化に関して、教育施設（農場、演習林、家畜病院を含む）設備は必ずしも現在の進歩及び近年の女子学生の増加を考慮した対応がなされておらず、問題がある。

農場、演習林、家畜病院などの活用については、実習や卒業研究によく利用されており、相応である。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

特に優れた点及び改善点等

成績評価基準の設定について、その厳格化と統一化、そしてその公表は極めて重要であるにもかかわらず、ほとんど取組がなされておらず、問題がある。

講義・実験・実習・卒業研究のための教育施設・設備の充実と高度化に関して、教育施設（農場、演習林、家畜病院を含む）設備は必ずしも現在の進歩及び近年の女子学生の増加を考慮した対応がなされておらず、問題がある。

4. 教育の達成状況

この項目では、対象組織における「教育の達成状況」について、「学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況」及び「進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況」の要素ごとに教育目的及び目標に照らした達成の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の達成の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標に照らした達成度の状況

【要素1】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況

進級及び卒業、留学の状況として平均進級率は85%以上、平均卒業率は83%であり相応である。毎年20名前後の退学者や休学者がいるが、その原因の分析を含め組織的に対応する必要がある。派遣留学生数が増加傾向にあることは、優れている。

資格取得状況からの判断は、資格取得者数が近年やや少なくなったが、それでもかなりの割合の学生が資格取得をし、また教育目的に適っており、相応である。

在学生の授業評価から見た判断は、80%以上の学生が、総合的に高いと評価し、90%以上の学生が学力、知力の増大に役立ったと評価していることから、優れている。

卒業生の教育評価から見た判断は、卒業生を対象として農学部の教育に対する「優れた点」を専門知識、専門技術、一般教養、卒業論文、その他、の5項目の中から複数選択させるアンケート調査を行い、それぞれ41%、42%、31%、17%、7%が「優れている」という回答をしているが、農学部教育全般に対して、卒業生がより大きな満足感を得られるよう、今後さらなる検討を行う必要がある。

【要素2】進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況

大学院への進学者数76名、進学率32%から判断して、目標に対する達成状況は、相応である。

就職状況から見た判断は、就職率が5年平均81.3%であり、九州地域に人材を送り出し、地域に貢献している

点は、相応である。

卒業後の進路状況から見て、大学で受けた専門教育の内容（進路選択、進路先での仕事・学業の対応、大学で学んだ知識の活用）に対して肯定的な回答が60%以上を示したことから、取組は優れている。ただ、平成14年度卒業生のみを対象としたアンケート結果であること、「強い否定」を含めて否定的回答もかなりあることから、この点についての十分な分析が望まれる。

卒業後の国際貢献から見て、青年海外協力隊での活躍から達成度は相応と評価し得るが、就職後の勤務先からの派遣、私的な活動についても把握しておくことが望まれる。

雇用主の教育評価から見た判断は、雇用主を対象としたアンケート調査から、対象組織の教育に満足している事を示しており優れているが、「専門知識」と「専門技術」を卒業生の優れた点として回答した雇用主は50%でしかなかった点について、十分な分析が望まれる。

この項目の水準は「教育目的及び目標において意図する教育の成果が相応に達成されている。」である。

特に優れた点及び改善点等

在学生の授業評価から見た判断は、80%以上の学生が、総合的に高いと評価し、90%以上の学生が学力、知力の増大に役立ったと評価していることは、優れている。

雇用主の教育評価から見た判断は、雇用主を対象としたアンケート調査から、対象組織の教育に満足している事を示しており、優れている。

5. 学習に対する支援

この項目では、対象組織における「学習に対する支援」について、「学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況」及び「自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標の実現への貢献度の状況

【要素1】学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況

入学時のオリエンテーションや研究室選択の際のガイダンス等はきめ細かく行われているが、専門科目の履修方法の説明を不十分と回答した学生が34%に達していることは、改善の余地がある。

学習を進める上での相談・助言体制として、農学部全教員が2～3人の学生のチューターとなって、各種の相談に応じ、オフィスアワー（授業内容等に関する学生の質問等に応じるための時間として教員があらかじめ示す特定の時間帯）を設けシラバスに記載していることなど、これらの取組は相応であるが、学生からの相談に対する教員の対応について肯定的に感じていない学生が40%近くいる点は、内容を分析し、適切な対応が望まれる。

留学生に対する支援体制として、留学生1名に対してチューター1名を配置し、組織として留学生後援会の設置を行うなどの取組、留学生会ホームページ、メーリングリストの構築を行うこれらの取組は、優れている。

交換留学やインターンシップなどの課外学習活動の支援体制として、とかく受け身になりがちな国際交流の実施において、平成14年度における6名の派遣留学生実績は、優れている。

【要素2】自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況

附属図書館や農学部図書館が学生の自主的学習の場として有効に機能している。図書館の休日開館や農学部図書室における学生の文献収集などの利便性を図るための

職員配置、ネットワークによる英語学習システムの導入などは相応であるが、インターネット環境の整備については、改善の余地がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

特に優れた点及び改善点等

入学時のオリエンテーションや研究室選択の際のガイダンス等はきめ細かく行われているが、専門科目の履修方法の説明を不十分と回答した学生が34%に達していることは、改善の余地がある。

留学生に対する支援体制として、留学生1名に対してチューター1名を配置し、組織として留学生後援会の設置を行うなどの取組、留学生会ホームページ、メーリングリストの構築を行うこれらの取組は、優れている。

交換留学やインターンシップなどの課外学習活動の支援体制として、とかく受け身になりがちな国際交流の実施において、平成14年度における6名の派遣留学生実績は、優れている。

6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では、対象組織における「教育の質の向上及び改善のためのシステム」について、「組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制」及び「評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況」の要素ごとに改善システムの機能の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の機能の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

改善システムの機能の状況

【要素1】組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制

組織として教育活動の実施状況や問題点を的確に把握し、教育活動を評価する体制について、自己評価委員会、外部評価委員会並びに評価実施委員会が組織され、各委員会が相互に連携しながら組織としての教育活動評価に取り組んでいることは、相応である。

外部有識者による評価（平成13年度）、卒業生に対するアンケート（平成15年2月）、民間企業、国・地方自治体、教育関係機関等へのアンケート（平成15年2月）等、種類の異なる3つの外部評価を実施していることは、相応である。

個々の教員の教育活動を評価する体制としては、個々の教員の教育に対する寄与の評価は行っていないが、学生の授業評価アンケートに基づき各教員が授業内容・方法の改善案をFD委員会に報告しており、取組としては相応である。

【要素2】評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして、農学部FD委員会の設置、全学FD及び共通教育ワークショップへの参画、農学部FD学習会の開催、農学セミナーの実施など多くの多様な取組が行われており、優れている。

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付ける方策としては、評価結果を反映させ、教育を改善するための様々な方策が練られており、相応である。

この項目の水準は、「向上及び改善のためのシステムが相応に機能している。」である。

特に優れた点及び改善点等

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして、農学部FD委員会の設置、全学FD及び共通教育ワークショップへの参画、農学部FD学習会の開催、農学セミナーの実施など多くの多様な取組が行われており、優れている。

評価結果の概要

1. 教育の実施体制

学科、教育コースの構成について、教育目的に沿ったバランスのとれた学科構成が行われ、柔軟性のある教育コース制により、きめ細かな教育実施体制を採っており、生物生産学科家畜生産学コースの授業科目に獣医学科の教員が参加するなど学科間の協力が図られている。また、附属施設（農場、演習林、家畜病院）も有効に活用されており、これらの取組は、優れている。

教員組織の構成について、助手が少ない点や女子学生が半数を占めている現状を踏まえると女性教員が少ない点（特に女性の教授・助教授はゼロである）は、改善の余地がある。

この項目の水準は「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

2. 教育内容面での取組

教職免許並びに各種技術資格の取得に必要な授業科目が適切に配置されていることは優れており、また家畜体内受精卵移植及び家畜体外受精卵移植師の資格が国内で鹿児島大学と他1大学のみで得られることは、特筆すべきことである。

民間企業や農家など学外における研修の取組状況として、近隣のみならず、「国際協力農業体験講座」や「国際農学・農業体験講座・北米コース」といった国外での研修を行っていることは、国際性を身に付けさせる教育として、特に優れている。

この項目の水準は「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

3. 教育方法及び成績評価面での取組

成績評価基準の設定について、その厳格化と統一化、そしてその公表は極めて重要であるにもかかわらず、ほとんど取組がなされておらず、問題がある。

講義・実験・実習・卒業研究のための教育施設・設備の充実と高度化に関して、教育施設（農場、演習林、家畜病院を含む）設備は必ずしも現在の進歩及び近年の女子学生の増加を考慮した対応がなされておらず、問題がある。

この項目の水準は「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

4. 教育の達成状況

在学生の授業評価から見た判断は、80%以上の学生が、総合的に高いと評価し、90%以上の学生が学力、知力の増大に役立ったと評価していることは、優れている。

雇用主の教育評価から見た判断は、雇用主を対象としたアンケート調査から、対象組織の教育に満足している事を示しており、優れている。

この項目の水準は「教育目的及び目標において意図する教育の成果が相応に達成されている。」である。

5. 学習に対する支援

入学時のオリエンテーションや研究室選択の際のガイダンス等はきめ細かく行われているが、専門科目の履修方法の説明を、不十分と回答した学生が34%に達していることは、改善の余地がある。

留学生に対する支援体制として、留学生1名に対してチューター1名を配置し、組織として留学生後援会の設置を行うなどの取組、留学生会ホームページ、メーリングリストの構築を行うこれらの取組は、優れている。

交換留学やインターンシップなどの課外学習活動の支援体制として、とかく受け身になりがちな国際交流の実施において、平成14年度における6名の派遣留学生実績は、優れている。

この項目の水準は「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして、農学部FD委員会の設置、全学FD及び共通教育ワークショップへの参画、農学部FD学習会の開催、農学セミナーの実施など多くの多様な取組が行われており、優れている。

この項目の水準は「向上及び改善のためのシステムが相応に機能している。」である。

意見の申立て及びその対応

当機構は、評価結果を確定するに当たり、あらかじめ当該対象組織に対して評価結果を示し、その内容が既に提出されている自己評価書及び根拠資料並びに訪問調査における意見の範囲内で、意見がある場合に申立てを行うよう求めた。機構では、意見の申立てがあったものに対し、その対応について大学評価委員会等において審議を行い、必要に応じて評価結果を修正の上、最終的な評価結果を確定した。

ここでは、当該対象組織からの申立ての内容とそれへの対応を示している。

申立ての内容	申立てへの対応
<p>【評価項目】 教育の達成状況</p> <p>【評価結果】</p> <p>【要素1】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況</p> <p>卒業生の教育評価から見た判断は、卒業生を対象としたアンケート調査によると、<u>農学部教育によって得た技術・知識に満足度を示しているのは50%に満たず、卒業論文は15%程度しか肯定的な回答をしておらず、卒業生は達成度は十分とはいえないと評価している点</u>は、検討を要する。</p> <p>【意見】 「農学部教育によって得た技術・知識に満足度を示しているのは50%に満たず、卒業論文は15%程度しか肯定的な回答をしておらず、卒業生は達成度は十分とはいえない」としているが、この部分は適切な表現ではないと考える。</p> <p>【理由】 この評価結果は、自己評価報告書の57ページ、「図4-7 卒業生へのアンケート：優れた点」に基づいているものと思われる。図4-7は、訪問調査時の意見書にも述べたように、「<u>本学の教育で優れていた点は何ですか。（複数選択可）</u>」という設問に対する回答をまとめたものである。このアンケートでは、本学の教育で優れた点を、専門知識、専門技術、一般教養、卒業論文、その他、の5項目の中から選択するようになっている。回答者の63%が1個だけを選択回答した。その結果、専門知識と選択回答したものが全回答者の50%未満であり、卒業論文と選択回答したものが15%程度であった。</p> <p>仮に、「本学の教育で、専門知識は優れていますか？」という設問に対して肯定的な回答が50%未満であった、あるいは、「本学の教育で、卒業論文は優れていますか？」という設問に対して肯定的な回答が15%程度しかなかった</p>	<p>【対応】 下記のとおり修正した。</p> <p>卒業生の教育評価から見た判断は、卒業生を対象として農学部の教育に対する「優れた点」を専門知識、専門技術、一般教養、卒業論文、その他、の5項目の中から複数選択させるアンケート調査を行い、それぞれ41%、42%、31%、17%、7%が「優れている」という回答をしているが、農学部教育全般に対して、卒業生がより大きな満足感を得られるよう、今後さらなる検討を行う必要がある。</p> <p>【理由】 申立ての理由にある趣旨は、訪問調査時においても説明を受け認識しているが、他方、複数選択回答が可能でありながら評価が低い項目があることも事実である。その点を踏まえた、今後の農学部教育の一層の充実を期待した評価結果であるが、評価結果の趣旨をより明確にするため、具体的に修正を行った。</p>

たということであれば、評価結果のような表現が適切であると思われる。図4-7の卒業生のアンケートは、複数選択可となっているので、優れた点に卒業論文を選択回答しなかった者も、卒業論文を否定的に捉えたとは言えない。むしろ、このアンケート結果は、卒業論文より、専門知識、専門技術を高く評価した卒業生が多かったということを示しているとも考えられる。したがって、「農学部教育によって得た技術・知識に満足度を示しているのは50%に満たず、卒業論文は15%程度しか肯定的な回答をしておらず、」という表現は適切でないと思う。

特記事項

対象組織から提出された自己評価書から転載

「歴史」

鹿児島大学農学部は前身の鹿児島高等農林学校の創立が明治41年と古く、長い歴史を有していることが、現在、様々な面で教育に良い結果をもたらしている。広大な農場・演習林は実習教育に大いに活用されている。学内の農場・植物園は教育研究だけでなく、市民の環境教育や憩いの場として、広く利用されている。

本学部はこれまで、社会及び地域に有為な多くの優れた卒業生を輩出してきた。学生はこの伝統に大きな誇りを持ち、日々学んでいる。

現在、大学本部、法文・教育・理・工・農学部が入るメインキャンパスは前身の鹿児島高等農林学校の創立の地にあり、50万都市の中央部に位置し、学生生活に恵まれた環境にある。

「学部教育」

入学当初、農学部の新入生全員に必修の農学概論を開講しているが、農学への動機付けに非常に役立っている。8学部を有する総合大学であることから教養科目が幅広い点も優れている。また、「国際協力農業体験講座タイ・ミャンマーコース」「国際農学・農業体験講座、北米コース」「臨床獣医学特別研修」で海外体験をさせることは、農業あるいは専門教育に対する興味を強く引き起こすものとなっている。専門教育では、卒業生を含む企業等の第一線の技術者、研究者、経営者による「バイオ産業論」を開講して、バイオサイエンス関連産業の現状、将来展望を把握させ、職業意識を啓発している。これらは農学部独自のものであり、優れた点である。また、広大な附属施設での実習教育も優れている。農場は学内を含め4カ所あり、牧場は広く、獣医学科を含めた実習教育によく利用されている。演習林は大隅半島の高隈山系にあり、広大で、照葉樹の自然林と屋久杉等の人工林は実習教育でよく活用されている。